美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要
1987, Vol.32, 28－35

小学生の音楽行動に関する研究(I)

杉　山　知　子

I　はじめに

音楽は明治の学制発布以来，教科として学校教育の中に組み入れられている。しかし「学校唱歌校門を出ず」ということばに象徴されるように，学校の音楽は日々の子どもの生活から切り離されたところで展開される傾向にある。それはマスコミや現代社会の音楽と学校音楽のギャップ，あるいは子どもたちの自然な音楽感情と教科としての音楽が指向する感情の隔たりといえるものであるかもしれない。とにかくこのような教科としての音楽の社会からの孤立が学校における音楽の地位を低下させているものと考えられる。

これは我が国ばかりでなくアメリカにおいても考え直されている問題であるが，[1]音楽を教科の中において生きたものにするためには，子どもたちの音楽に対する態度や環境の影響を考慮する必要がある。子どもが日常生活においてどのような音楽を聴き，歌っているのか，またどのような音楽を好むかなどその嗜好傾向を探ること，そして音楽に対してどのような態度をとるかという行動傾向を探ること，このような児童理解から出発することが必要だと考えられる。

音楽の嗜好についてはＮＨＫ放送世論調査所により詳細な報告がなされているが，[2]音楽行動については，まだ研究が始められたばかりであり，今後の研究に負うところが大きい。

そこで本稿では小学生の音楽行動に関する一般的傾向を探り，教科としての音楽に対する子どもの意識と音楽行動との関連について調査分析する。しかし，このことは子どもに対する安易な迎合を目的とするものではない。一方的な，教師の主観的信念に基づくのではなく，また逆に子ども主導になるものでもなく，教師と子ども両者によるTeacher－Pupil Programingに基づく授業成立を目標とするものである。このように基盤整理をはかり，児童の音楽行動のありのままを把握することにより，音楽教育法・指導法を考慮する端緒としたい。

なお今回は小学校５・６年を対象に調査研究を行なった。

II　調査の概要

1. 調査対象

大都市・中都市・小都市・郡部から対象校を抽出するという全国的規模のものは統計研究会の法岡氏によりすでに報告されている[3]。しかし音楽教育は特に地域との関連が深く，地域差も大きいと考えられるため，本稿においては法岡報告との比較を前提に，岡山県の郡部より一校を対象に調査した。

学年と人数は次表の通りである。

	男　子	女　子	計
5年生	26名	32名	58名
6年生	41	33	74
計	67	65	132

2. 調査時期

昭和61年８月７日

3. 調査方法

一斉記入法……クラス担任を通じて教室で出席

児童全員に一斉記入させた。

4. 分析方法

単純集計及びクロス集計により，5・6年生児童の一般的な音楽行動傾向，並びに教科としての音楽に対する意識と音楽行動との関連について探った。なお，小学校5・6年生ともなると男子，女子の差が可成り明確になると考えられるため，男女差にスポットを当てて集計・分析した。

また，各質問項目において回答のないものがあった。これは該当する選択項目がないからという意図的な無回答とは考えにくく，単なる記入もれとみなす方が正しいと思われる。従って回答項目での比率を出す場合には回答者数から除外した。

Ⅲ 調査内容と回答傾向

調査は

1. 子どもの日常生活における音楽行動の面
2. 学校の音楽に対する意識について
3. 学校以外の音楽教育に関すること

の三つの側面から成り，前述の法岡報告における調査内容[4]と同じものとした。

1. 子どもの日常生活における音楽行動

学校が唯一の音楽提供の場であった昔とは異なり，現代では音楽メディアを通して様々な音楽に接する機会が多い。また音楽教室は隆盛をきわめ，音楽は子どもたちの生活の一部とさえいえる様相を呈している。しかし，現実に学校の授業以外における子どもたちの音楽行動がどのようなものであるかは，まだはっきりとは把握されていない。そこで学校以外における子どもの音楽行動を以下の12項目にわたり質問した。

①学校外で何かの楽器を演奏することがありますか。
②学校外で歌をうたうことがありますか。
③家の人といっしょに楽器を弾いたり歌をうたったりすることがありますか。
④友だちと音楽の話をすることがありますか。
⑤家の人と音楽の話をすることがありますか。
⑥音楽会に出かけることがありますか。
⑦レコードや音楽テープを聴くことがありますか。
⑧自分の好きなレコードや音楽テープを買ったことがありますか。
⑨友だちとレコードや音楽テープの貸し借りをすることがありますか。
⑩ラジオやテレビの音楽番組を聞いたり見たりすることがありますか。
⑪音楽のことが載っている雑誌や本を読むことがありますか。
⑫自分で作詞をしたり作曲をしたりして音楽を作ったことがありますか。

これらに対する回答は次のようであった。

表1 子どもの音楽行動

項目		男子	女子	
①	イ	2 (3.1)	15 (23.4)	
	ロ	21 (32.3)	26 (40.6)	※※※
	ハ	42 (64.6)	23 (35.9)	
②	イ	8 (12.3)	13 (20.0)	
	ロ	25 (38.5)	35 (53.8)	※
	ハ	32 (49.2)	17 (26.2)	
③	イ	2 (3.0)	6 (9.4)	
	ロ	9 (13.4)	16 (25.0)	
	ハ	56 (83.6)	42 (65.6)	
④	イ	7 (10.4)	10 (15.4)	
	ロ	17 (25.4)	34 (52.3)	※
	ハ	43 (64.2)	21 (33.3)	
⑤	イ	4 (6.0)	13 (20.0)	
	ロ	17 (25.4)	29 (44.6)	※※※
	ハ	46 (68.7)	23 (35.4)	
⑥	イ	0 (0)	3 (4.7)	
	ロ	4 (6.1)	18 (28.1)	※※※
	ハ	62 (93.9)	43 (67.2)	
⑦	イ	13 (19.4)	25 (38.5)	
	ロ	35 (52.2)	35 (53.8)	※※
	ハ	19 (28.4)	5 (7.7)	
⑧	イ	8 (11.9)	10 (15.4)	
	ロ	16 (23.9)	24 (36.9)	
	ハ	43 (64.2)	31 (47.7)	
⑨	イ	1 (1.5)	1 (1.5)	
	ロ	3 (4.5)	7 (10.8)	
	ハ	63 (94.0)	57 (87.7)	
⑩	イ	18 (27.3)	33 (51.6)	
	ロ	20 (30.3)	24 (37.5)	※※※
	ハ	28 (42.4)	7 (10.9)	
⑪	イ	7 (10.4)	16 (24.6)	
	ロ	7 (10.4)	21 (32.3)	※※※
	ハ	53 (79.1)	28 (43.1)	
⑫	イ	5 (7.5)	4 (6.3)	
	ロ	7 (10.4)	10 (15.6)	
	ハ	55 (82.1)	50 (78.1)	

イ. よくある　　※※※ $P < 0.001$
ロ. ときどきある　　※※ $P < 0.005$
ハ. ほとんどない　　※ $P < 0.05$

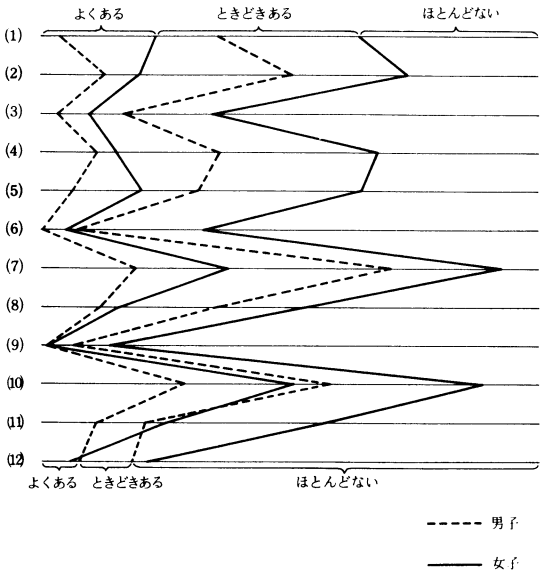

図1　音楽行動の男女間比較

表1をわかりやすくするためにグラフ化したものが図1である。図1より，最も多くみられる行動は男女共に⑩⑦であることがわかる。これは即ちラジオ・テレビの音楽番組視聴とレコードや音楽テープの聴取である。これに対して自らが音楽を表現する「楽器演奏する」や「歌をうたう」は「よくある」が少なく，比較的多い女子においても20％程度にすぎない。

このように行動面を聴取と表現で比較した場合，男女共に聴取行動が中心といえる。また，音楽の話をしたり（④⑤）音楽会に出かける（⑥）レコードやテープの購入や貸し借り（⑧⑨）音楽関係の雑誌や本を読む（⑪）といった音楽の社会生活化はあまり見られず，これは年齢的な発達段階との関連が深いものと思われる。特に「音楽会に出かける」「レコードやテープの購入」は親から完全に独立した行動をするとはいえない5・6年生の音楽行動としては少ないであろうと推察される。

また総じて音楽行動は男子より女子の方が積極的といえる。特に「楽器演奏する」「歌をうたう」「音楽の話をする」（①②④⑤）においては女子が男子を大きく上回っている。これは「楽器演奏する」については学校以外の音楽教育との関係が深いものと考えられる。つまり，後述するように学校以外の音楽教育は女子の受ける割合が多いこと，その中では器楽教育の占める比率が高いことにより必然的に女子の演奏機会の方が多くなると考えられるのである。

このような男女の音楽行動における傾向の差は可成り明確であり，質問の12項目中8項目（①②④⑤⑥⑦⑩⑪）において有意な連関（交互作用）がみられた。

以上のように5・6年生の音楽行動は全体的に日常的な社会生活化はなされておらず，歌をうたったり楽器を演奏する表現行動よりも，ラジオ・テレビ・レコード・テープ等の聴取行動中心であることが明らかになった。

2.　学校の音楽に対する意識

すべての子どもが共通にもっている音楽環境として学校の音楽が挙げられる。この学校音楽に対する子どもたちの意識を把握することは教育成果をあげる上での前提条件といえよう。そこで

(1)学校教科の中での音楽の好き嫌い

(2)学校音楽と学校以外の音楽について

(3)音楽の授業で望む学習活動

(4)音楽の成績との関連

について調査した。

(1)学校教科の中での音楽の好き嫌い

学校の教科における音楽について好き嫌いを尋ねたところ表2のような結果を得た。これは8教科のうち好きな科目3つにマルをつけさせたものである。

5年生では44.8％の子どもが音楽を好きな教科に挙げており，比較的好まれている教科といえる。一方，6年生では34.8％と10％減少している。また女子は5・6年共に60％が好きな教科に挙げているのに対し，男子は5年生26.9％，6年生15.4％と低率であり，しかも6年生で激減している。このように音楽が好きかどうかは男女間の差が大きく，全教科の中でも音楽は家庭と共に最も男女差の大きい教科となっている。そし

表 2　学校教科の中での音楽の好き嫌い

(%)

教科＼学年男女	5 年 生			6 年 生		
	男	女	計	男	女	計
国　語	26.9	28.1	27.6	28.2	33.3	30.4
算　数	26.9	9.4	17.2	46.2	33.3	40.6
理　科	30.8	25.0	27.7	41.0	33.3	37.7
社　会	19.2	3.1	10.3	20.5	6.5	14.5
図　工	76.9	59.4	67.2	69.2	46.7	59.4
体　育	42.3	31.3	36.2	66.7	41.9	56.5
音　楽	26.9	59.4	44.8	15.4	60.0	34.8
家　庭	50.0	84.4	69.0	12.8	41.9	26.1

て音楽は女子には好まれる教科であるが，男子にはあまり好まれない教科であることがわかる。

このような，音楽に対する好き嫌いの男女差とその傾向は法岡報告[5]と一致しており，今回の調査対象校特有のものではない。

それでは音楽の好き嫌いと音楽行動との関係はどのようになっているのであろうか。図2は音楽を好きな

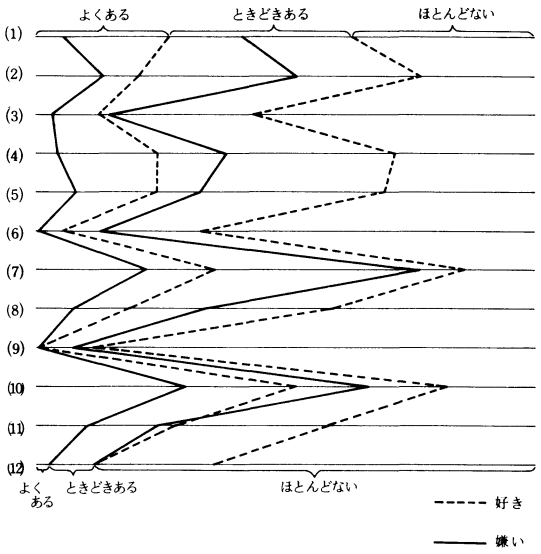

図 2　音楽の好き嫌いと音楽行動

3科目に挙げている者とそうでない者について①～⑫の行動をグラフ化したものである。

これを見ると，当然の結果ではあるが，音楽を好きな教科に挙げている者の方がそうでない者よりも音楽行動は積極的といえる。その中でも学校外での楽器演奏や歌唱（①②③）音楽の話をする（④⑤）レコード等の購入（⑧）雑誌を読む（⑪）音楽を作る（⑫）といった面での差が大きく，レコードやテープ・ラジオテレビの音楽番組の聴取（⑦⑩）面では比較的差が少ない。つまり，教科音楽が好きな者とそうでない者の差は聴取行動においてよりも表現行動，及び音楽の生活化において大きく表わされるといえよう。

(2)学校音楽と学校以外の音楽について

次に学校で習う音楽と学校で習う以外の音楽について好き嫌いを質問したところ表3のような結果を得た。

表 3　学校音楽と学校以外の音楽について

(%)

項目＼学年男女	5 年 生			6 年 生		
	男	女	計	男	女	計
両方好き	12.5	53.1	37.5	7.3	50.0	26.0
学校で習う音楽が好き	29.2	12.5	17.9	12.2	12.5	12.3
学校以外の音楽が好き	33.3	34.4	33.9	41.5	25.0	34.2
両方嫌い	25.0	0	10.7	39.0	12.5	27.4
計	100.0 (24人)	100.0 (32人)	100.0 (56人)	100.0 (41人)	100.0 (32人)	100.0 (73人)

女子は5・6年共に「両方好き」が最も多く約半数を占める。そして「学校音楽が好き」「学校以外の音楽が好き」まで含めると，5年生100％，6年生87.5％が音楽を好きとしている。これに対し男子は5・6年共「学校以外の音楽が好き」が最も多く，5年生33.3％，6年生41.5％となっている。しかし男子には「両方嫌い」とする者も多く，5年生では25％，6年生では39％にのぼっている。

このように女子は音楽が好きであり，しかも学校音楽も多くの者に支持されるのに対し，男子には好まれ

ず，また好きであっても学校以外の音楽を挙げる者が多く，この点でも男女差が明確となった。

それではこの「学校音楽」と「学校以外の音楽」の好き嫌いと音楽行動との関連はどのようであろうか。

表4は学校音楽等の好き嫌い別に①～⑫の行動を集計したものである。

表4　「学校音楽」「学校以外の音楽」の好き嫌いと音楽行動

（　）は%

項目＼好き嫌い		両方好き（39名）	学校音楽が好き（20名）	学校以外の音楽が好き（44名）	両方嫌い（26名）	
①	イ	13(33.3)	― ―	4(9.3)	― ―	※※※
	ロ	16(41.0)	5(25.0)	21(48.8)	5(20.0)	
	ハ	10(25.6)	15(75.0)	18(41.9)	21(80.0)	
②	イ	9(23.1)	― ―	9(20.5)	3(11.5)	※※※
	ロ	25(64.1)	9(47.4)	20(45.5)	5(19.2)	
	ハ	5(12.8)	10(52.6)	15(34.1)	18(69.2)	
③	イ	6(15.8)	― ―	2(4.5)	― ―	※※※
	ロ	14(36.8)	3(15.0)	6(13.6)	1(4.0)	
	ハ	18(47.4)	17(85.0)	36(81.8)	25(96.0)	
④	イ	11(28.2)	― ―	5(11.4)	1(4.0)	※※※
	ロ	18(46.2)	8(40.0)	19(43.2)	5(19.2)	
	ハ	10(25.6)	12(60.0)	20(45.5)	20(76.9)	
⑤	イ	13(33.3)	― ―	4(9.1)	― ―	※※※
	ロ	21(56.4)	8(40.0)	12(27.3)	3(11.5)	
	ハ	5(10.3)	12(60.0)	28(63.6)	23(88.5)	
⑥	イ	3(7.9)	― ―	― ―	― ―	※※※
	ロ	15(39.5)	1(5.3)	7(15.9)	― ―	
	ハ	20(52.6)	18(94.7)	37(84.1)	26(100.0)	
⑦	イ	18(46.2)	2(10.0)	14(31.8)	4(15.4)	※※
	ロ	18(48.7)	15(75.0)	21(47.7)	13(50.0)	
	ハ	3(5.1)	3(15.0)	9(20.5)	9(34.6)	
⑧	イ	8(20.5)	1(5.0)	5(11.4)	4(15.4)	
	ロ	14(33.3)	6(30.0)	15(34.1)	5(19.2)	
	ハ	17(46.2)	13(65.0)	24(54.5)	17(65.4)	
⑨	イ	1(2.6)	― ―	― ―	1(4.0)	
	ロ	6(15.4)	1(5.0)	3(6.8)	― ―	
	ハ	32(82.1)	19(95.0)	41(93.2)	25(96.0)	
⑩	イ	22(57.9)	5(25.0)	17(38.6)	5(19.2)	※
	ロ	9(23.7)	8(40.0)	17(38.6)	10(38.5)	
	ハ	7(18.4)	7(35.0)	10(22.7)	11(42.3)	
⑪	イ	11(28.2)	2(10.0)	8(18.2)	2(7.7)	※※※
	ロ	16(41.0)	1(5.0)	8(18.2)	2(7.7)	
	ハ	12(30.8)	17(85.0)	28(63.6)	22(84.6)	
⑫	イ	6(15.8)	― ―	3(6.8)	― ―	※
	ロ	9(23.7)	2(10.0)	5(11.4)	2(7.7)	
	ハ	23(60.5)	18(90.0)	36(81.8)	24(92.3)	

イ．よくある　　※※※ P＜0.001
ロ．ときどきある　　※※ P＜0.01
ハ．ほとんどない　　※ P＜0.05

表4より「両方好き」な者と「両方嫌い」な者では前者が明らかに音楽行動は積極的である。これは当然のことといえるが，では「学校音楽」と「学校以外の音楽」ではどのようであろうか。表4を見ると①～⑥⑨⑫において「学校音楽が好き」とした者で「よくある」と回答した者はひとりもいない。また他の項目を見ても「学校以外の音楽が好き」な者の方が積極的な行動をとっていると思われる。

また各項目ごとに有意差の検定をした結果，表4に示すように⑧⑨以外はすべて有意差が認められた。従って⑧⑨，つまりレコードやテープの購入や貸し借りという点を除いて，学校あるいは学校以外の音楽の好き嫌いと音楽行動の間には有意な連関があると考えられる。そして行動における積極性の面では，両方好きな者が最も強く，学校音楽が好きな者より学校以外の音楽が好きな者の方が，より積極的といえる。学校音楽が好きという者がさほど積極的な音楽行動を示さないのは「好き」ということが日常生活にまで浸透していない，つまり生活化につながっていないことの表われではないかと考えられる。

音楽について「もともと生存そのものに必要，不可欠なものとして人間が生み出したものでありながら，これもまた人間が生み出した教育システムによって，音楽の自己破壊を進行させ……[6]」というように学校音楽教育の一つの矛盾であるといえよう。

このように「学校音楽」と「学校以外の音楽」の好きな者を比較した場合，「学校音楽が好き」な者は積極的な音楽行動をするとは言い難く，むしろ「学校以外の音楽が好き」な者の方が音楽を楽しんでいるように思われる。このことは音楽に夢中になる年代が10代後半，20代前半に続いて10代前半で多いこと[7]に関連して「学校以外の音楽が好き」とする者がいち早く音楽熱の渦の中にはいっていくことを示しているものと思われる。

(3)音楽の授業で望む学習活動

学校の授業でどのような学習を望むかについて質問した。質問内容は

①歌をうたうことについて

②楽器を演奏することについて
③音楽を作る，作曲をすることについて
④レコード等で音楽を聴くことについて
⑤楽譜・音符の勉強をすることについて
の5項目であり，それぞれ「やりたい」「どちらともいえない」「やりたくない」の3つの選択肢より選ばせた。結果は表5の通りである。

表5　授業で望む学習活動

( )は%

項目＼男女		男子 (67名)	女子 (65名)	
歌をうたう	イ	5 (7.5)	24 (36.9)	※※
	ロ	38 (56.7)	32 (49.2)	
	ハ	24 (35.8)	9 (13.8)	
楽器を演奏する	イ	17 (25.4)	42 (64.6)	※※
	ロ	26 (38.8)	17 (26.2)	
	ハ	24 (35.8)	6 (9.2)	
音楽を作る	イ	10 (15.2)	11 (16.9)	※
	ロ	14 (21.2)	32 (49.2)	
	ハ	42 (63.6)	22 (33.8)	
音楽を聴く	イ	26 (38.8)	46 (70.8)	※※
	ロ	23 (34.2)	14 (21.5)	
	ハ	18 (26.9)	5 (7.7)	
楽譜・音符の勉強をする	イ	3 (4.5)	13 (20.0)	※※
	ロ	19 (28.4)	42 (64.6)	
	ハ	45 (67.2)	10 (15.4)	

イ．やりたい　　※※　P＜0.001
ロ．どちらともいえない　　※　P＜0.005
ハ．やりたくない

表5は音楽の授業で望む学習活動を男女別に表わしたものである。数値は属性別の比率を示す。表5より「音楽を聴く」「楽器演奏する」をやりたいとしている者が多いことがわかる。しかし全般的な傾向としてやはり男子は女子に比べて消極的であり，半数以上の者が「やりたい」とする活動は男子においては見られない。また「歌をうたう」「楽器演奏する」は男女間の差が最も大きく，女子36.9～64.6%がやりたいとしているのに対し，男子は7.5～25.4%にすぎない。

一方，音楽を作ったり，楽譜・音符の勉強という創作や理論的な面については，やりたい者が少ない。がしかし男子では「歌をうたう」よりも「音楽を作る」方をやりたいという者が15.2%と多い。このように，望む活動も男女間でやや異なっていることがうかがわれ，各項目内における男女の傾向の差は全てにおいて有意であった。

以上のように学習活動においても「音楽を聴く」聴取活動が男女を通じて好まれ，音楽を作ったり，楽譜の勉強をすることは好まれないことが明らかになった。そして歌をうたったり，楽器を演奏する表現活動は女子には好まれるが男子にはあまり好まれない活動といえる。男子が歌うことを好まない原因として変声期の問題も考えられるが，今回の調査ではそういった理由までは触れておらず断定はできない。

次に学校教科の音楽が好きかどうかということと，5項目のやりたい，やりたくない等についての関連を調べた。その結果，教科音楽が好きな者は「やりたくない」がきわめて少なく，「音楽を作る」においても18%がやりたくないとしているにすぎない。逆に教科音楽が嫌いな者も結構「やりたい」としており，音楽を聴いたり楽器を演奏することは3分の1以上の者がやりたいと答えている。（図3）

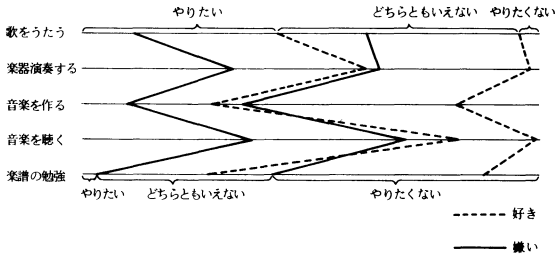

図3　教科音楽の好き嫌いと望む活動

このように子どもたちは教科の音楽が嫌いな者でも音楽活動すべてを拒否するわけではなく，特に聴く活動は多くの者に支持される活動といえる。

(4)音楽の成績との関連

学校の音楽では成績という形で子どもが評価される。そこで教科音楽が好きかどうかと成績との間には何らかの関係があるのではないかと思い調査した。ただし

ここでの評価基準である「大変よい」「まあよい」「ふつう」「少し悪い」「大変悪い」は学校での評価そのものではなく，学校の音楽内容個々の評価に対し，子どもたちが総合的に自己判断したものである。

その結果は表6の通りである。

表6　教科音楽の好き嫌いと成績

（　）は%

成績＼好き嫌い	好き（50名）	嫌い（77名）
たいへんよい	5（10.0）	0
まあよい	11（22.0）	11（14.3）
ふつう	29（58.0）	44（57.1）
少し悪い	2（4.0）	16（20.8）
たいへん悪い	3（6.0）	6（7.8）

1%水準で有意

表6より「好き」な者も「嫌い」な者も成績は「ふつう」が最も多く，それを頂点とした正規分布をしていることがわかる。そして「好き」な者は「よい」の方に「嫌い」な者は「悪い」の方にやや比重がかかっていることもうかがわれる。また検定の結果「好き」「嫌い」と成績の間の傾向は1%水準で有意差があった。従って成績がよいことと音楽が好きということ，あるいは成績が悪いことと音楽が嫌いということの間には関係があることが判明した。しかし成績がよいから音楽が好きなのか，音楽が好きだから成績がよいのかという因果関係は明らかではない。

3.　学校以外の音楽教育に関するもの

現代では学校以外の音楽教育が大きな比率を占めている。黒川氏の記述の通り[8]，音楽教室や塾での音楽教育，個人教師によるプライベート・レッスン等，広く音楽教育を担っているものとして学校教育ではない場の存在が大きい。それではそういった学校以外での音楽教育を受けている者の状況はどのようであろうか。

表7は学校以外の音楽教育経験について質問した結果である。

女子は半数以上が習った経験をもち，5年生では現在も過半数が習っている。これに対して男子は大多数

表7　学校以外の音楽教育経験

（　）は%

経験＼学年男女	5年生 男	5年生 女	6年生 男	6年生 女
現在習っている	1（3.8）	17（53.1）	2（4.9）	11（33.3）
過去に習ったことがある	5（19.2）	4（12.5）	3（7.3）	7（21.2）
習ったことがない	20（76.9）	11（34.4）	36（87.8）	15（45.5）
計	26（100.0）	32（100.0）	41（100.0）	33（100.0）

が習った経験がなく，現在習っている者は5年生1名6年生2名である。このように学校以外の音楽教育を受ける者は圧倒的に女子で占められている。

また学校以外で音楽教育を受けていることと教科の音楽が好きかどうかについては表8のようになり，音楽の成績との関係については表9のようになった。

表8　学校以外の音楽教育経験と学校音楽の好き嫌い

経験＼好き嫌い	教科音楽が好き	教科音楽が嫌い
現在習っている	23	7
過去に習ったことがある	9	9
習ったことがない	18	61

0.1%水準で有意

表9　学校以外の音楽教育経験と成績

成績＼経験	現在習っている	過去に習ったことがある	習ったことがない
たいへんよい	4	1	0
まあよい	11	1	10
ふつう	15	13	47
少し悪い	1	2	17
たいへん悪い	0	2	8

0.1%水準で有意

表８・表９を検定した結果，表８は0.１％水準，表９も0.１％水準でそれぞれ有意となった。従って学校以外で音楽を習っていることと教科の音楽が好きかどうかということ，また学校以外で習っていることと成績が良いかどうかということの間には有意な連関があることが判明した。

Ⅳ　考察およびまとめ

５・６年生の音楽行動について調査してきたが，強く感じられるのは全般に男女の間で相当な開きがあるということである。この男女差は，調査するに当たっての一つの視点と考えていたわけであるが，日常の音楽行動においても，学校の音楽に対する意識においても，また学校以外の音楽教育の面においても予想以上の差となって表われた。それは一言でいえば，すべてにわたって女子の方がより積極的であり，かつ音楽が好きであるということである。しかし，学校で習う音楽が好きということと日常の音楽行動とは結びつきが弱く，学校で習う以外の音楽が好きな者の方が音楽行動は積極的である。このことは学校音楽教育の矛盾を示すものと思われる。

さて日常の音楽行動についてであるが，その内容はラジオ・テレビ・レコード・テープ等の聴取行動が中心といえる。そしてこの「聴く」ということは授業においても大多数の子どもに好まれる活動である。一方歌をうたったり楽器演奏をする表現活動は日常生活においてそれほど多くは見られず，また授業においては女子には好まれるが男子には好まれない活動といえる。特に歌をうたうことは男子にはほとんど支持されない。

次に学校以外の音楽教育との関連を調べた。その結果，学校以外で音楽教育を受けている者，あるいは受けた経験のある者は男子は少数であるが，女子は半数以上であった。そして現在習っているかどうかと音楽の成績の自己評価や音楽の好き嫌いには有意な連関がみられた。

このように音楽が好きな者は音楽行動も積極的であり，成績もよく，学校以外でも音楽教育を受けるというように，相乗的に音楽に近づき能力も高まるのに対し，嫌いな者は音楽との距離がますます広がっていくものと思われる。そして好きな者と嫌いな者の種々の差が大きくなることは，教育上の焦点が合わせにくいことにつながり，５・６年生の指導上の大きな問題点といえよう。

以上のように教科の音楽が好きか嫌いかは単なる好き嫌いの問題を越えて，音楽行動や音楽能力にまで影響を及ぼしている。従って音楽活動を活発にし，生活化にまで導くためには，子どもに対し音楽の授業を好きにさせるところからアプローチする必要があると考えられる。

ところで今回の調査において，授業で望む活動で最も多いのは「レコード等を聴く」ということであった。「聴く」ことは音楽活動の基本となる重要な活動であるが，概して，聴くのは楽だからという消極的な意味でしか支持されない傾向にある。その上，聴くという内的活動は内面が見えないだけに指導の困難な分野でもある。しかし多くの子どもたちに支持されているこの「聴く」活動を用いることが音楽の授業を好きにさせる最良の糸口になるのではないかと考えられる。そして子どもと音楽を近づけることが何よりも大切なことと思われるが，具体的な方法は今後の課題として残される。

注および引用文献

1）マイクル　L．マーク著　松本ミサヲ　田畑八郎共訳『音楽教育の現代化』，音楽之友社，1986年，p20
2）ＮＨＫ放送世論調査所編　『現代人と音楽』，日本放送出版協会，1982年，p71～73
3）法岡淑子　小学生の音楽環境，音楽教育学第13号，1983年，p26～37
4）法岡　前掲書３），p27
5）法岡　前掲書３），p31
6）柳生　力　音楽は好きだが授業は嫌い，音楽教育研究37，1983年，p10～17
7）ＮＨＫ放送世論調査所　前掲書２），p10
8）黒川　武　公教育における音楽の基礎的能力とは，音楽教育研究48，1986年，p166

（1986.12　受理）